

刻む会

たより

No. 15

1997.3.17

長生炭鉱の「水非常」を

歴史に刻む会

(代表 山口 武信)

宇部市常盤一、二、九(陣内)

☎〇八三六(二)八〇〇三

六度目の 遺族を迎えて

事務局 陣内 厚生

一九四二年の水非常から数えて今年はちょうど五十五周年にあたる。六度目となった犠牲者追悼式を計画するにあたって、これがただの年中行事に終わることなく、なんらかの前進につながる特徴を持たせたいものと願っていた。

一月末、韓国の遺族会から事前の連絡が入り、来日の人数は9名とのこと。併せて二つの要望が「刻む会」に寄せられました。一つはピーヤの水中探査を実施してほしいこと。遺族として遺骨の発掘を望んでおられるが、それがかなわぬとなれば、地底につながるであろうピーヤをどうしても調査してみたいという



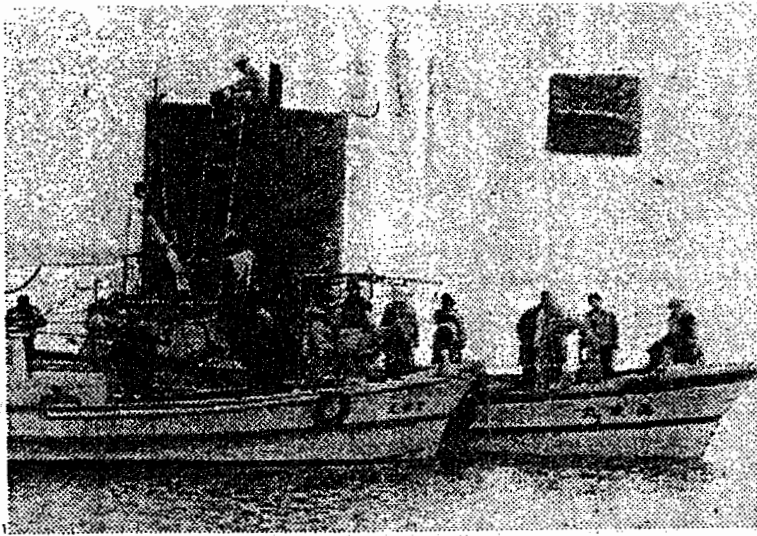
ことである。二つ目は市民交流集会で講師を招き、講演を聴く機会をつくってほしいこと。これには釜山外国語大学の金文吉教授(日韓現代史の研究者)を指名してこられた。

さて「刻む会」では、これに対応するために急遽話し合ったが、講演会は問題ないものの、ピーヤの探査はどうしたらよいのか見当もつかなかった。そこで市当局にその関係の情報の提供を依頼したところ、市内の海事業者を紹介して頂くことができた。その一つの宇山海事と連絡が付き、翌日の下見の約束を取り付けたのが一月三十日、すなわち遺族来日の前日である。

§ § §
一月三十一日(金)朝。穏やかな天候であることにまずは安堵した。昨年の大雪を思うと、今朝の滑り出しは上々だ。刻む会の者7名が下関に出迎え、遺族9名(うち女性4名)と挨拶を交わした後乗用車数台に分乗し、県庁へ直行。国際課のスタッフに迎えられた一行は、型通りの対談に望む。いつになく多いマスクミの取材攻勢だ。あまり展望のない話し

合いの中で、今後の協力を要請して退席した。昼食は県庁十五階のレストランで国際課のおごりによる洋食をご馳走になる。これはいわゆる「食糧費」というわけ(？)。この後は宇部へ。

風は強かったが、快晴の長生海岸に一



(手前のピーヤ調査の様子)

行は立ち寄った。青々とした海に立つピーヤは、初来日の遺族にとってほどのように映っただろうか。ここでもマスコミ取材が待っていた。ところで海岸には、前日約束した宇山海事さんが来てくれており、早速、潜水作業によるピーヤの探査の打ち合わせに入った。宇山さんは快く潜水夫の手配や漁船のチャーターの件を約束してくれたので、思いのほか早く実現にこぎつけられる。実施は明日の午前中ということに決まった。

続いて午後四時、宇部市役所訪問。市長はオーストラリアに出かけていて不在とのことで、対応してくれたのは福祉部長であった。県庁でもそうであったが、このたびの来日では「要望書」は作らず口頭で訴えるものであった。これまで何回か要望書を出したが、納得のいく回答が得られなかったもので、遺族会としては一つの抗議の意味でもある。話し合いは平行線だったが、「碑の建立」「資料の公開」などで、「検討する」との返答を得た。いつもながら明確な展望のない空しさが残る。金永鉉遺族会長の顔は持っていないきような悔しさをにじませ、曇

ったままだ。

一日目の夕食は、町の焼き肉レストランへ。刻む会の者も加わり楽しいひとときを過ごす。初来日の5名(女性4、男性1)の方々ともボディ・ランゲイジで意志疎通できるのも、数年にわたる交流の積み重ねの賜物であろう。

§

§

§

二月一日(土)。午前10時より海事会社によるピーヤの水中探査開始。床波漁港に集合し、チャーターした漁船に山口代表、男性の遺族全員、大阪から駆けつけた金教授が乗り込む。ほかの人達は西光寺にて位牌との対面に望んだが、刻む会側の人手不足や寺側の勘違いがあったりして、十分な対応(詳しい通訳説明など)ができず申し訳なかった。これは大いに反省すべきことであろう。一方、追悼式の準備はと言えば、いつもの場所に設営された砂浜の式場は、潮の加減で百斤余り離れた場所に移らざるを得なくなり、女性スタッフも動員してテントその他の資材の移動に思わぬ手間がかかってしまった。大忙しである。

さて、はじめての水中探査は、ピーヤ

の周りに二その船が浮かび、岸壁からはほとんどその様子は分からないが、めったに見られない光景であった。これの詳報は山口代表のレポートに譲るが、ピヤ内の坑道から杉材でできた梯子の一部が採取されたのが、思わぬ貴重な収穫と言えよう。探査には時間がかかり、これに参加した人たちは昼食抜きで追悼式に望むことになってしまった。

定刻の午後一時半、朝から比較的穏やかだった天候は、青空さえ見えるようになった。宇部市内や近郊より関心を抱く人びと、報道関係者などを含め百名が集い、追悼式は始まった。採取されたばかりの泥まみれの梯子の木片もテントの前に並べられ、人目を引く。毎年のことだが、遺族によって綴られた「弔辞」の朗読のときには、その永年の鬱積した悔しさ、悲しさが伝わってきて、聞く者をして絶句させてしまう。私たちも遺族の思いをいくらかでも共感し、共有することがこの運動の基盤を成すわけだから、その意味から、遺族のなまの声を多くの人がびとに聞いてもらいたいと願わざるを得ない。式の最後には、全員が海に向け花

を献げ、追悼した。

続いて、浜中自治会館に移り、市民交流集会を開催。暖かい豚汁をすすり身体が一息ついたところで、金文吉教授による特別講演「天皇制国家と朝鮮人」を聴く。運動への力強い提言がなされ、大いに参考になった。遺族紹介や討論などもあり熱気を感じられる集会であった。

この日の夜は、毎年恒例となった懇親会を宇部緑橋教会で開く。この席で昨年刻む会が製作した紙芝居『アボジは海の底』を、遺族の皆さんに見て頂くために公開上演(?)した。涙を流しながら観ておられるご婦人(犠牲者の遺児)の姿が印象的であった。彼女のアボジの境涯そのものがモデルになっているように思えたのではないだろうか。懇親会は、そうした遺族のお気持ちがいくらかでも溶け合い、慰められれば、という意味でもたれているが、日韓の草の根の交流の大切さをいよいよ感じさせられる。この夜は飲むほどに酔うほどに、歌あり笑いあいの楽しい時間を過ごすことができた。

§ § §
明けて二月二日は日曜日。特にプロゲ

ラムは組んでいないが、在日大韓キリスト宇部教会の招きで、遺族全員が教会の礼拝に参加見学。金教授も若い時代に牧師であった人で、礼拝出席、昼食会まで遺族と行動を共にされた。

実はこの日の午前中、山口代表は葬儀社から骨壺を購入し、遺族の元に携えてきた。遺族会では前日採取した木片の一部と土少々を、遺骨に代わるものとして壺に収め韓国に持ち帰られるとのこと。さらに希望者にはこれを分骨のように分けたと言われる。本物の遺骨ではないのが無念である。

午後一時半、刻む会のスタッフと合流した一行は宇部をあとにし、下関に向かう。お天気は芳しくなく雨模様だ。フェリーポートに早めに着き、たっぷり時間があつたので、ポートビルのロビーで三々五々歓談することしばし。一部の方は時間を惜しんでショッピングへ。そして四時半、いよいよ別れの時が来た。いつもの別れの光景であるが、遺骨箱をもつた孫事務局長の姿が目立って映る。遺族の皆さんと再会を約し、お互いの笑顔を交わしながらお別れした。

長生炭鉱潜水調査

一九九七年二月一日午前一〇時、前日の打ち合わせによって床波港岸壁に行くと、宇山海事の宇山氏・下関彦島の潜水夫とスタッフ二名と船主は既に待機していた。天気は晴れ今までにはない穏やかな追悼式日和になった。早速救命具を用意して乗船乗船者は当方山口、遺族側金永鉉会長・揚玄副会長・孫鳳秀事務局長・金宗道氏・金聲浴氏と京都の李元宰氏の七名に金釜山外語大教授の計八名。宇山氏・船主・金子潜水夫ら三名の総勢一三名である。他にKRYテレビのスタッフが船を一隻借りて同行した。

今回の調査は追悼式が迫って韓国遺族側から要望があって、宇部市福祉課に潜水業者の選定を依頼していたところ、一月三〇日市役所に再度要望書を持って行った時に福祉課か

ら業者に関するメモを手渡されたので即日電話して翌日打ち合わせをする事になった。三日打ち合わせの結果、二月一日にピーヤの調査を実施する事に決まった。

潮の都合で、沖のピーヤから調査を始める事にした。昨年までの天候からは考えられない好天と静かな海であった。着いてみるとピーヤの高さは思ったより高く、スタッフが用意したアルミの梯子ですぐ登ると言うようには行かなかつた。ピーヤにロープを巻き船を固定して潜水夫とアシスタントの一人がピーヤに登った。ピーヤの上部は一部横の鉄筋が露出して錆びて細い針金のようになっていた。外部は風浪に晒されてクラックができていた。また、波の干満により潮に没する所の上部には小さな海蛭がびっしり付着し、下部は牡蠣に覆われていた。これは手前の

ピーヤも同様であった。海上部のクラックからの水漏れは無かった。ピーヤの中へは金子潜水夫が潜った。金子氏の話ではピーヤの内部の水位は海面よりも高く、水は塩分が感じられなく茶褐色で透明度はほとんどなく五センチメートル位に濁っているという。潜っていくと深度計で一メートル位ばかりの所から下は鉄などの構造物が沢山あって危険で潜られないという。予定時間よりかなり遅れていたが、教授はまだ潜って土を採って来いとか、きつと遺骨があるから探すようにとか言っていたので、ウエットスーツの破損や他の事故でも起こっては困るし、土の採取なら手前のピーヤで出来るからと説得して、その上で遺族にピーヤ内部を見て貰って手前のピーヤに向かった。

手前のピーヤは沖のピーヤより一段と高いので、船の操舵室の上から

梯子をかけてロープをピーヤの鉄パイプに括り付けて固定して登った。このピーヤの鉄パイプは錆びていたが水中にまで続いていた。ピーヤの内部の水から上の部分にコンクリートの突起様のものが四つ二段の計八个見えていた。何のために在るのか不明だが、ピーヤの蓋でもするためかとも思われた。濁り水の中は片側は構造物があつて危険な所もあるが反対側は潜る事が出来るそうで、潜水をはじめた。このピーヤの上端は後から補修をした跡が見られ、濁水の中野視界は殆ど効かない。ピーヤの底の坑道まで潜り、手で探りながら行くと片側に型枠の梁と支柱が手に触れたと言う。ただし、壁は呼吸する時の泡が触れてもパラパラ土が落ちてくるという。このピーヤでも遺族は内部を見る事ができた。その後で金子潜水夫は坑底の土を採取して揚げ、つづいて六メートルばかり

の杉丸太一本と五〇センチメートル位の長さで五センチメートルばかりの幅の角材を一本引き上げた。これらは梯子の一部であつた。一二時を過ぎてまだ遺骨を探すように教授はいうけれど昼食どころか追悼式にも間に合わなくなりそうなので、追悼式の時間は公にしてあるので遅らせる訳にはいかなと言つて、やっと調査を終わらせて港にもどつた。昼食には間に合わなかつたが、式にはどうにか間に合つた。

今回拙速で日韓の間で行き違いはあつたが、不十分ながらそれなりの成果を挙げ得たと思つている。刻む会そのものもこの度は、人手不足や連絡の不十分な所もあつて反省しています。遺族を送つて夜になつての杉丸太探しと運搬をしていただいた方々は最後まで大変だつたと思ひます。ご苦労様でした。

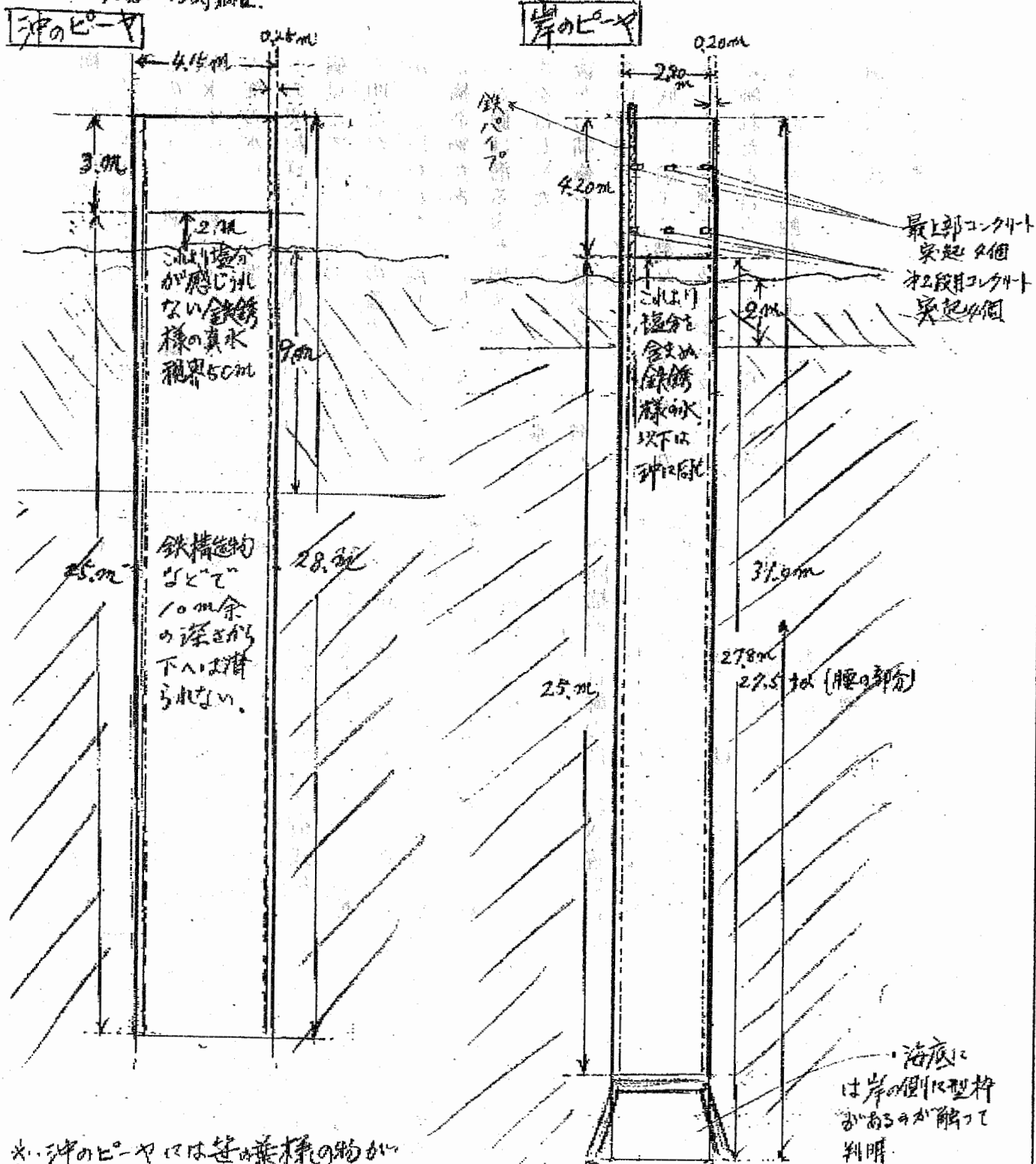
なお、井上正人さんの話では、杉丸太類は水非常直後に使用したとのことでした。また、ピーヤの水が塩分が少ないのは、当時ピーヤの下に送風用のコンプレッサーが二台あつたが、海水の流入口が完全に塞がつた後、その冷却用の地下水を坑道地下から取水していたので、その為になつたのだろうと言ふことでした。なお、ピーヤの略図を付けておきます。

以上

(山口武信)

1997年2月1日

10時～13時調査



沖のビーチ
 2.7m
 錆びた
 が感じれ
 ない鉄筋
 様の真水
 視界50cm

鉄構造物
 など
 10m余
 の深さから
 下へは滑
 られない。

岸のビーチ
 2.80m
 4.20m
 錆びた
 鉄筋
 様の水
 以下は
 沖のビーチ

最上部コンクリート
 突起4個
 中2段目コンクリート
 突起4個

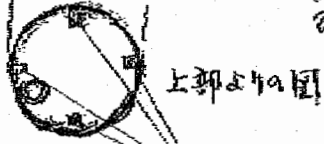
27.8m
 27.5m (腰の部分)

* 沖のビーチには筵の葉様の物が
 落ちていた。

岸のビーチには氷面に、2個の漁網用浮か
 落ちていた。坑道近くから6m弱の杉丸太(構材)
 及び、スタッフ用の50cmばかりの角材も拾い上げ
 た。また、遺族の要請で坑底の土を採取
 した。

・ 坑底に
 は岸の側に型枠
 があるが融けて
 判明

・ 反対側は構造物
 が危ない



上部より4個
 コンクリート突起

金文吉教授講演録

この度こういう講演会をたのまれて、皆さんと一緒に考える時間をくださいまして感謝いたします。今日、僕が話をしたい内容は、韓国語で韓国の方のために話をしようと思っていたところですが、日本の方が多いので日本語で話をし、簡単に韓国語でまとめて話します。

最初に、少し、テーマを直したいと思えます。僕がFAX入れたのは「軍国主義国家と天皇制」ではなくて、「日本天皇制国家と朝鮮人」のつもりでしたが、ちよつとかわってしまつたみたいです。似たような題名ですが、各論から見るとかなりの部分で違っていますので訂正します。

「天皇制国家と朝鮮人」ということですが、まず、日本の歴史を作った人々は誰かということから考えたいと思います。実は、日本史を作ったのは朝鮮人です。これは、私が言っている話ではありません。日本史やっておられる方々は皆口を揃えて言います。古代も、中世も、近現代もそうです。韓国人のなかでも、今の前に座っている人々です。何故かという、明治維新から天皇制国家が始まったのですが、実は、大きく言えば朝鮮の国の支配のために、朝鮮人を支配するために、明治維新を行ったのです。そし

て、日清戦争から終戦まで、小さい日本の国が世界を支配しようとしたのです。本当危ない時でした。日本の国に力があつたのは朝鮮人のおかげだったので。明治維新が起こつてすぐ大きな国清国と戦いました。また力を得てロシアと戦いました。朝鮮人が働いてくれたからそれだけの力を得ることができたのです。

朝鮮人がどれだけ働いたかは皆さんよくご存じだと思います。その歴史を皆さんが知っているのです。こういう「刻む会」ができたとは強く思っています。日本は「フアジズム」で朝鮮人を使つたのです。「フアジズム」とは日本語に訳せば、こういうことになります。力ある人、力のない人の首を切る、「しばく」そういう意味なんです。今日も山口先生やいろんな人からお話がありました。彼等は苦勞してここでなくなつたのです。苦勞という言葉は数年後に生まれた僕たちには分からないと思います。この「フアジズム」でこういうふうには朝鮮人を使つたことを皆様お分りになつてください。そういう状況で朝鮮人が何故日本に来たのか、それが今日のテーマの内容でした。正直に言いますと、近代史を作った主人公たちも分らないと思えます。だから、そういうことをはっきり教えてあげようと思つて遺族たちのために、今日は話を考えてきました。

「強制連行」という言葉が使われる前に日本に来た人の遺族は、彼等がこの強制連行で連れて来られたのか、こつちでお金を儲ける為に来たのかはつきり分らない。そういうことをちよつと具体的に話したいと思えます。

「フアジズム」が登場したのはいつころだと思えますか。一九三七年七月ごろ、中国との戦争の頃から「フアジズム」の歴史があつたんです。その時に「フアジズム」といいますと、持っているものをポケットから全部出せといわれました。また、自分の登記している土地全部を奪われたのです。そして体だけになるのです。体だけになつたらまた「しばく」のです。そうすると、食べなければならぬのに、子供がいるのに、両親がいるのに、日本人のために痛付けられながら働かざるを得なかつたのです。丁度一九三七年七月、中国との戦争のためにそういう「フアジズム」の政治歴史が始まつたのです。

一九三七年九月に炭鉱の社長がみんな集まつて会議をしたのです。「今度の中国の戦争から社会戦争へと戦争の時代だ。では戦争の時代には何を準備しなければならぬか。」戦争が計画通り進み、日本が勝つために準備しなければならぬのは、石炭です。戦争のエネルギーは石炭です。石炭を全部掘り出すように会議

をやつて政府に掛け合つたのです。政府は「そうするためには人数がすくいくじやないか」と答えたのです。すると、彼等は「朝鮮人がいるじやないか。朝鮮人は一二歳以上全部呼んで使おう」といつたのです。その時国が朝鮮の村に、日本の国に行つて石炭を掘つたら、金儲けになるから皆行くように募集したので。その時には、皆自ら金儲けにいきました。何故金儲けに行かなければならないのかというと子供がいるし食べなければならぬし、例えしばかれても行きますといつて自主的に行つたのです。その時はまだよかつたのです。その時代が一九三九年です。しかし、その時に来られた方々も、話が全然違ふ、給料は三分の一にもならないし、食べ物も全然くれないので、困つて逃げた。

そして、一九三九年七月八日、国会で労働法をつくりました。徴用例を発表するので。それで朝鮮人が自らこつちに来ても、こういうことをしたらだめといふことが決まつた。自ら来たけれども給料は半分以下で（それはそれでも我慢できるが）、人間以下の扱いだった。そんな状況で、規則はこういうことを発表したので。それは、一つには、国のためには働かなければならない。家族を考えたからだめ。二つ目は、内地に来た後、訓練所に入つて訓練を必ず受けて現場仕事を

すること、三つ目に職場を変更する時に必ずその上の人に相談して変更すること。四つ目には、協和事業を団体で加入すること。協和といふことは朝鮮人を使う制度がなくて、皆グループがあつたのです。この長生炭鉱でもグループがありました。グルーパの中の班長、頭が支配していました。住所も変更しなければならぬし、内地に来て朝鮮の風習朝鮮語すべて捨てさせ、日本語を必ず使うことにして、最後に警察官を呼び職場の指導者の命令を必ず守ることでした。何故こゝういふことこゝで話すのかお分かりですか。遺族のためにこゝういふ話を準備したのです。遺族達も分からないところがあつたからです。一九三九年お父さんが自分が金儲けをするために家をでた。強制連行ではない。そう思う人もいると思つてこゝういふ話をしました。そもそも、自主的に来たけれども、死ぬのはもちろん動物のように人間以下の扱いだったのではないでしょう。だから、家のお父さん、おじいさんは自らお金儲けで長生炭鉱に来たと考えても、実際は、その協和団体から命令されて、うそばかりで、こゝちに来て、帰る道もなく苦勞して、苦勞してこゝで命を閉じたのです。

その後、一九四二年二月一三日には国会が開かれてまた法律が変わりました。朝鮮労働者を管理する決定が下るので。強制連行といふ言葉直接を使うようになり。とにかく朝鮮人が生まれた場合は一二歳以降日本の国のために働かなければならない。男性は軍人として戦場に、炭鉱に行かなければならぬし、女性は、勲勞隊として行かなければならぬし、美人は「慰安婦」として引つ張られてしまつたのです。「慰安婦」もこゝで出てくるのです。一九四四年に入つてから、もう日本は本當に世界太平洋戦争のため。太平洋戦争は何の戦争だと思ひますか、世界を支配するために、実際に日本の地図を見てみたら本當におかしいでしょう。皆さん。小さい島の日本の国が、広いロシア、広いアメリカ、世界を支配する。本當に力が強くなりました。誰のおかげで日本が強くなつたと思ひますか。日本を強くしたのはさつき言つたように朝鮮人です。その中でもこゝにいはる遺族のお父さん達です。そこで、慰安婦の問題がでてきます。お母さんからよく聞きました。その時、家族には一〇歳はなれたお姉さんがいたのですが、逃げた押し入れの中に隠れていました。顔がちよつと美人な人は皆連れて行つて「慰安婦」にしてしまふからです。そういう時代になつていきます。

一九四五年八月一五日が来ました。日本は負けてしまひました。天皇も「私は神じや無い。人間です」といふ宣言をし

て、朝鮮人も皆、連行されている人々も解放されました。次に、少しテーマが代わって、では、こういう悲しい靈魂たちをどうしたらいいのかという問題を考えます。あまり近世を話してもどうにもなりません。役に立ちません。重要なのは今後の問題です。

一九四五年八月、日本は負けました。そしてアメリカ連合軍が支配したのです。その時ポツダム宣言を受諾しました。ポツダム宣言は日本が負け、朝鮮を解放したということのために法律を作るべきものでした。しかし、そこで問題があったのです。問題があるから、50何年すぎても、歴史が整理できてこない。悲しい心持って寒い時こっちに来なければならぬ。お金をかけて「刻む会」が一生懸命やらなければならぬことになるのです。それは何が間違っていたかというところ、その会議の時に力ある国ばかりが参加して、小さい国は参加しなかったということですね。その時に、朝鮮の人、中国の人達が参加して対応したら、命掛けて反対したと思うのです。アメリカに問題があるのです。アメリカが政治関係のために、朝鮮・中国など被害者の国々が参加出来ないようにしたのです。アジア諸国をどうにか保つてやるかということが全く無かった。もししたら、日本は大変なことになるって、日本という国

はなくなっていた。しかし、アメリカはそうしなかったのです。

朝鮮から人々を呼んで、この冷たい水の中に骨もまだ探さないうちにこういう悲しい歴史を作った人々は誰だと思いませんか。昭和天皇です。しかし、日本の天皇を追及しなかった。そうしなければならなかったのに。もしその時に、天皇が責任を取ったなら日本の国は大変なことになっていってしまふ。でも天皇はそのままになってしまいました。私たちは悲しかった。こんな歴史を作ってしまったのは天皇ですよ。もしこの時に他の何もなかったら、天皇に責任を取れといえよ。戦後、日本の天皇制国家を背後に今日まで、日本の政治を扱っているのが自民党。天皇が責任を取ったなら、天皇制国家ではなくなくなってははずです。もしその時に、天皇に重い責任を負わせていたら、天皇制残っていないはず。韓国は王はもういません。今の天皇はアキヒト天皇。朝鮮人に悪いことさせたのは昭和天皇、お父さんですから、今の天皇は父の話なので責任が取れない。

今後の問題について、細かいことがまだありますが、何故日本は、自民党がその時代の歴史を整理していかないか理由を考えてみます。彼等は強制連行でも各企業が責任を取らなければならぬといっ

ています。大きくいえば、昭和天皇の責任ではないといっている。国家は責任無いか。本当だと思つたら追悼式に参加しない方がいい。「慰安婦」の問題でも、金大統領が先日会って話したことはこのことです。「慰安婦」は個人の問題で国家の責任ではない。団体が募金をあげたからいいじゃないですか」といいます。元「慰安婦」のハルモニたちは、お金のために闘っているのではありません。ここにすわっている昭和の歴史を作ってきた主人公たちもお金のために闘っているのではないのです。歴史を正しく理解してほしいということです。簡単なことのようにですが、簡単ではありません。国家に責任はないという態度は、「慰安婦」もそうですが、強制連行もそうです。

もう一つは、日本の国がそういうことをする理由を皆さん下から考えないといけません。ドイツは、日本の国と同じように悪かったのですが、自国の発展だけでなく、被害者の国のために働きました。歴史を綺麗に整理したのです。今後私たちがしなければならぬ大事なことです。

それから、最後に非常に重要なことですが、これから私たちがしなければならぬ4つのことを述べます。一つ目は、犠牲者遺族のために考えなければならぬ

